

させました。この辞書が『英和对訳袖珍辞書』といい、東京外国語大学附属図書館にも増補改訂された一八六六年版が所蔵されています。また、正科の授業もオランダ語から英語に変更し、さらにフランス語に堪能な村上英俊という医者も入れました。村上の著書『仏蘭西詞林』も、一八六四年版が東京外国語大学附属図書館に所蔵されています。

ところで、蕃書調所の「蕃書」には、日本を文明の国＝中華、外国を野蛮、とみる観念が表されています。蕃書調所が洋書調所に名を変えるのは一八六二年ですが、再び攘夷勢力が強くなると、広く百工技芸、物理考究のための機関として、開成所、さらに開成学校と改称されました。

そして、明治維新を経て、一八七三年（明治六）に、開成学校から外国語部門が分かれ、これに外務省のドイツ語・ロシア語・中国語の外国語学所が合体して、「外国語学校」となりました。場所は、一ツ橋通町一番地（現在の千代田区一ツ橋二丁目）です。このあと、外国語学校を独立させた開成学校は、東京大学へとつながってゆきます。

以上のように、東京外国語大学は、外国語の翻訳、通訳者の養成のために、国によって設けられた機関をはじめりとしていくのです。もちろん、今では、ただ外国語を読み、話すだけではなく、広く世界諸地域の政治・経済、社会や文化、そして国際的な問題を学び考える大学に転身しています。現在に至る過程には、まだまだ長い道のりと、多く

の先人たちの努力があります。詳しくは、『東京外国語大学史』（一九九九年刊）をみてください。大学の歴史を知ること、楽しいものです。

（よしだ・ゆりこ 東京外国語大学出版会副編集長）



開国一五〇年と 東京外国語大学

吉田ゆり子

今、いろいろなイベントに、「開国一五〇年」、「開港一五〇年」などと書かれているのを目にすることがあると思います。これは、どういう意味かご存じですか。日本が開国したのは、今から一五〇年前の一八五九年ということです。が、さて、その年は何があったのでしょうか。

ちょっと思い出してもらおうと、「鎖国」をしていた日本に、一八五三年、黒船に乗ってペリーがやってきました。その後、紆余曲折を経て、幕府は一八五八年、アメリカをはじめオランダ・ロシア・イギリス・フランスと、次々と修好通商条約を結びました。これによって、日本は神奈川・長崎・箱館（函館）を翌年から開港し、自由貿易をはじめることになったのです。その一八五九年から数えて、今年

が一五〇年ということになります。

では、開国一五〇年と東京外国語大学と、どのような関係があるのでしょうか。

実は、「鎖国」をしていた日本には、こうした西欧諸国の情報を知るための書物を読んだり、西欧の軍事技術や科学的な知識を取り入れたり、さらには交渉にあたるための人材がいまませんでした。わずかに、当時、正式な国交のあったオランダ語を解するオランダ通詞が頼りでしたが、英語さえも理解することはできません。そのため、ペリーが来たときも、当初、オランダ語通訳どうしのやりとりとなりました。

そこで、幕府は、外国の事情を知り、軍事的な技術を学ぶために、書物を翻訳し、あわせて外国との交渉にあたる人材を要請する機関として、蕃書調所ばんしょていじょを設立しました。これが、東京外国語大学の前身です。場所は、現在千代田区九段坂下でした。一八五七年正月一八日の蕃書調所の開所式には、幕臣の子弟一九一人が出席しました。授業の内容は、オランダ語の素読→輪読→会読で、一人の教授に三〇人くらいの生徒が習っていたといえます。

その後、一八五八年の五カ国との修好通商条約締結とともに、英語を中心とする通訳の養成が緊急課題となりました。そこで、幕府は当時入獄中だった堀達之助ほりたつのすけという人物をわざわざ出獄させて蕃書調所に呼び、英日辞書の翻訳を